

一九七七年二月一日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社 発行人 滝野 忠

東京都渋谷区本町六丁目二八の二コーポル幡ヶ谷九〇四 電話(03)3377-4649 FAX(03)3299-5367
振替 〇〇一〇〇一九一五八四三二 労金 東京労金本店 No 1154163

購読料 月額 600円 6カ月前納制

〈もくじ〉

■巻頭言

「小さな」音学会で「大きな」勇氣 滝野 忠……………2

「リストラ万能」論で分裂する財界……………3
—新谷のり子さんのコンサートから—
—ニッサン二万二〇〇〇人首切りの波紋—

◇資料 日経連の回状(一九九九年十月二〇日) ◇……………5
—ニッサン二万二〇〇〇人首切りの波紋—
—「平和フォーラム」参加組合は二十二—

日産京都工場閉鎖で下請け企業はたいへん……………6
—これまでの「合理化」とは雰囲気が違う!—
—元氣だったアメリカの労働組合(上)—

「労働者である」ということ……………7
—元氣だったアメリカの労働組合(上)—
—全通「人事交流」をめぐる議論に寄せて—

天皇在位十年式典は「空振り」……………10
—全通「人事交流」をめぐる議論に寄せて—
—国立大学は文部省の「水使い」か—

合理化の嵐で痛める「乙女心」……………11
—国立大学は文部省の「水使い」か—
—「白紙撤回」の闘いをすすめて—

鹿児島でも市民投票条例制定の署名運動……………12
—「白紙撤回」の闘いをすすめて—
—鹿児島湾に「人工島」はいらぬ—

本屋さんの今と昔……………13
—鹿児島湾に「人工島」はいらぬ—
—恋愛映画に見るアメリカ市場主義のいま—

批判と共闘……………15
—恋愛映画に見るアメリカ市場主義のいま—
……………16

読者からのおたより……………16

旬刊 社会通信

NO. 754

一九九九年二月一日号

一九九九年二月一日発行
(毎月一日・二日・三日三回発行)

「小さな」音学会で「大きな」勇氣

新谷のり子さんのコンサートから

十一月十三日の「新谷のり子の小さな音学会」は、その題名とはまったくちがう、「大きな、大きな」音学会でした。「フランシーヌの場合」で反戦歌手、社会派歌手としてデビューされ三〇年。まさに新たな旅立ちにふさわしい、「平和への分かち合いを共に！」する感動あふれる音楽会だったからです。私は新谷さんと同世代で物書き商売を始めて約三〇年、マンネリ化している心をキュツとしめつけてくれました。新たな元氣と刺激を得た音学会でした。

時代は「新谷さんの心」を求めはじめています。「フランシーヌの場合」は、ベトナム戦争に心を痛めて自殺したフランシーヌ・ルコントをうたった歌。約二時間強、休憩時間もなく熱唱したジョン・バエズの「勝利を我らに」、ペルーの民謡「コンドルはとんで行く」、そして今では新しいけれど古典としての評価の高いボブ・ディランの「風に吹かれて」、ジョン・レノンの「イマジジン」等々（全十七曲）と、「平和と反差別」にどんな場所にも出かけて行き、そこで出逢った人々の命の叫びをしっかりと受けとめ、まだ見ぬ人に伝えてゆく。競争社会の最前線で苦悩する大人の声だけではなく、お仕着せの自由のなから聞こえてくる子どもたちの悲鳴や、破壊され続ける自然界の森林や、すべての生きものたちの嘆きもしつかり聞こうと思います、そしてメッセーじしていこう」との「歌と語り」は、三十年前が過去でなく現代社会であることを新谷さんは示してくれました。十二日の国立劇場での得体の知れぬ式典と皇居前での「売れっ子」芸能人を動員した集会との対比です。皇居前では、私などは名も知らぬ歌手に少女たちが歓声を上げ、涙すら流しておりました。顔も見ることできない隔離された集会だったのに「会えてよかった」と。

「小さな」音学会では、新谷さんの歌と語りをはじめて聞く若い人びとが、「新谷さんの心をほく、私のもののできたら」、「新谷さんのように生きたいのだけんど」と、マブタにいつぱい涙をためて聞き入っていました。おそらく彼や彼女たちは室内アンサンブルやオーケストラにはしばしば足を運んでいるはずですが、しかし、今日のような希望に満ちたパワーあふれる音学会は始めてだったのでは…

彼や彼女の後日談がふるっています。音学会終了直後、休日のはずなのにポケベルで呼び出され、その足で会社に行きさせられました。「どこへ行ってたんだ」と会社の上司、「新谷のり子さんの音学会に」と答えたところ、「のり子さんの音学会があったの。じつは、ほくもファンなんだ」と言ったとか。

音学会の圧巻は「約束」を歌った時です。いろんなことに関心もち、野次馬根性旺盛な読者のことですから、スペインの画家ルオーをご存じのはずです。彼の代表作に「叫び」があります。新谷さんのように魅力的な人が「叫び」を表現されるのですから、人の心に感動を与えないわけはありません。現代世界、とりわけ日本の最大の問題は、「ウン」と「マコト」が錯綜し、人間が誰をも信じられず、心がバラバラ、ズタズタにされていることです。極端にいえば「愛」すら、金銭勘定で処理され、社会全体がささみ切っていることです。

「真理」を伝えるには何が必要かを「小さな」音学会は、「大きく」教えてくれました。身体全体で表現すること、心の底から訴える努力をすること、それが労働運動、社会主義運動で問われているということです。

(滝野 忠)

「リストラ万能」論で分裂する財界

—ニッサン二万二〇〇〇人首切りの波紋—

いっぺんに首切るな、不断に首を切れ

「ニッサン二万二〇〇〇人首切り」のニュースは、首切ること、首切られることにすっかり慣らされてしまった日本全土にかつてない波紋をまきおこしている。今の特徴は、首切られる労組、労働者にあきらめの感が強いのに対し、首を切る経営者側に、首切りに対する危機意識が燃えあがってきたことだ。

財界の労務対策指令部の大将にこの五月就任したトヨタ自動車会長・奥田碩は就任以来、「雇用が悪くなると、消費者心理も冷え込みます。消費の落ち込みは、生産の減退や設備投資の減少につながる。『失業と消費停滞の悪循環』がそこにある」、「現在の我が国では従業員のクビを切ることがもてはやされるおかしな風潮がある。リストラ、経営のダウンサウジングと称して、従業員のクビを切れば株価が上がる」、「不景気だからといって簡単に解雇に踏み切る企業は、働く人の信頼をなくすに違いない。そして、いずれ人手が足りなくなるときには、優秀な人材を引きとめておけず、競争力を失うことになる」(『月刊文芸春秋』十月号)とくり返し発言する。

トヨタ自動車は、一九五九年の「労使平和宣言」以来、「カンバン方式」、「ジャスト・イン・タイム」の労務管理を徹底。乾いたタオルをなお搾る、搾取がおこなわれてきた。奥田が言いたいのは、不断にクビを切れ、いっぺんに首切りをやるなどというだけだ。

その証拠に今度のニッサンの首切りでは、「ひじょうに思い切ったことをしたが、あれだけの数字になると実行が難しい」と首切り案に不安を呈しながら、「そういう経営者(経営悪化を招いた経営者)はすでに去った。後始末の人とか、外から来たゴーン氏らは当事者ではない」と、ニッサン首切り成功に期待を表明する。なお日経連は十月二〇日、会長名で資料にのせた要請文を関係者に送付した。

隣の家を壊して、自分の家の火を消す

日経連と対極にあるのが経済同友会代表幹事の発言だ。彼は「ニッサン・リバイバルプランは今後の日本のリストラのモデルとして重要、日本人の経営者ではできなかった。会社を立て直すことも一つの責任のとり方」と全面賛成の意向だ。

経営者の揺れる心理をもっとよく示してみせたのが、関西経営者連合会会長で関西電力会長だ。彼は、「(日産のリストラ計画は)隣の家を壊してまでも、自分の家の火を消そうというやり方は、受け入れられない」、「(企業は)社会的責任の中で、最大の利益を追求すべきだ。自分の企業を守るためのリストラは必要だが、従業員や地域社会と話し合う必要がある」と述べている。

「職場の安定帯」は動揺

すさまじい首切りに財界も分裂し始めた。彼らは何を恐れるのか。「職場の安定帯」の崩壊である。一九七〇年代なかば日経連会長は日経連幹部たちにこう檄を飛ばした。

「政治が混迷している間の日本には安定帯がなければなりません。私は企業の職場を中心とする労使が安定帯となり得ると信じます。それに警察、裁判所が健在であり所要の官僚機構が健全であれば、政治の混迷期は案外経過できるものと信ずるものです」

これが日経連、財界の一貫した総意であり、「労使の安定帯」をもとに一九七〇年代以降、政治がとりしきられてきた。その典型が中曽根第二臨調（一九八二年）、民間政治臨調（政治改革推進協議会、一九九二年）である。しかし今、「労使安定帯」の基礎は動揺し、崩壊した。三種の神器」といわれた①年功序列賃金制度、②終身雇用制、③企業内福利にもとづく「企業内組合」を基礎とする日本の雇用慣行の崩壊である。四十五歳以上はすべて首切り、人減らしの対象となった。彼らは「おれの生活は何だったのか」と将来への希望を失っている。若者たちも先輩の動揺に「企業への忠誠心」を失い始め、「会社は生活のめんどうも、心・健康のめんどうもみてくれない」、「本当の生き方って何だろう」と考えざるをえなくなっている。

「ニッサン二万一〇〇〇人首切り」が、日本的労資慣行崩壊への触媒になることを財界は恐れているのだ。世界的大競争は今後、超巨大独占資本間の仁義なきたたかいに入る。アメリカ、ヨーロッパにくらべ日本は明らかに遅れをとっている。金融資本が呉越同舟ならぬ合従連衡をくり返しているのがその典型だ。弱者の連合は「弱肉強食」を理論とする資本市場では絶対に勝利者とはなりえない。勝ちぬくために、当面、企業利益向上が至上目的となる。その一番でつとりばやい方法が人件費削減、人減らしである。だから、日経連は失業はふえ続けるというのである。

ニッサン合理化への強い批判に驚がくした労働省は、①労使の協議を十分つくすこと、②個人面談を入念に行うなど従業員個人の意向を聴取すること、③他工場への異動が困難でやむを得ず離職せざるを得ない人々に対しては失業を経ないで再就職できるように必要な援助を行うこと、さらに、④雇用保険制度の活用―(1)失業等給付、(2)雇用安定、(3)能力開発、(4)雇用福祉―を財界諸団体に求めた。

労働省の官僚どもをビックリ仰天させたのは―

労働省がまとめた大企業四十一社の一九九六年から二〇〇一年にかけてのリストラ計画は十四万人余にのぼり、労働者の一二％に達したことだ。これら四十一社は一部上場会社で、一部上場会社は約千三百社だから十四万人に約三十倍をカケルとじつに約三百五十万人余が企業リストラの対象となる。こうして、「職場の安定帯」崩壊は必至となる。

労働者の意識は変わり始めた

今、政治も揺れ始めた。政治資金、介護、自・自合流で自自公はダッチロールをくり返す。裁判所も「クモ助」発言で規律にゆがみが見える。警察も神奈川県警の前代未聞の事件に揺らいでいる。官僚機構とはいえば、来年の省庁統合で既存の権益死守に精いっぱい弱まることはあっても強まることはない。そして今、日本的労資慣行がバブル崩壊、不

良債権の山のような累積の中で土壇場にある。

時代は揺れる。国民の「臨界」は間近である。その準備が急がねばならぬ。当面の最大の課題は別稿「集まり、学習し、議論する」中で方針を出し、小さな拠点を無数につくり出すことである。国民、労働者の意識は急速に変わっている。「生きた」情勢をつかみ回りの仲間との結びつきを大きくすることである。

(伊勢 太郎)

◇資料 日経連の回状(一九九九年十月二〇日)◇ 労使間での真摯な話し合いが重要

激化する国際競争の中で金融・通信・製造業など、あらゆる分野で生き残りかけた大規模な事業再構築の計画が相次いで打ち出されている。経済状況は幾分改善を見ているとはいえ、雇用情勢が極めて厳しい状態を続けている中であって、いずれも大幅な人員のスリム化を伴うものとなっている。

こうした事業再構築への取り組みは、今後、日本経済・社会の構造改革を進める上でさらに広がることが不可避であり、今後、雇用情勢が一段と悪化することが懸念される。

日経連としては、企業の長期的な発展と経済社会への貢献のために、左記に特段に留意し、雇用安定への取り組みを一層強化していきたいと考える。

記

一、経営のリストラを進めるに当たっては、まず、モノやカネの面で最大限の努力を行い、また雇用調整についても、残業の削減や新規採用の抑制による自然減などの対策を労使の話し合いを尽くした上で実施していくなど、雇用の維持・安定には最大限の努力がはらわれなければならない。

二、万やむなく雇用削減に至る場合には、その規模を最小限にとどめるよう努めるとともに、関連企業、地域経済等への影響などにも十分配慮すべきである。

三、従業員にも、企業の再活性化への取り組みにおけるコスト削減の重要性を十分に理解し、人件費をはじめとする費用の低減について、一層理解を深めてもらうことが必要である。

四、日本の労使関係の基本をなしてきた、各企業の労使間における十分な話し合いが何にも増して重要である。適時適切な情報の開示をベースに労使間で真摯な話し合いを行うとともに、やむを得ず退職者が出る場合にも行政・労使団体等の協力を得て再就職の斡旋などを進めることが肝要である。

「平和フォーラム」参加組合は二十一

十月二十二日、旧総評・社会党プロックの結集体であった民主・リベラル労働組合会議(中央労組会議)解散のあとを受け、「フォーラム平和・人権・環境」(平和フォーラム)が結成された。

参加組織は二十七。労組では自治労、日教組、私鉄、全農林、全水道、全たばこ、都市交、全林野、全自交総連、日放労、全国一般、政労連、全印刷、全造船機械、全造幣、全港湾、国労、全開発、繊維生活労連、全司法、全自建運輸、リーガル労連の二二、その他解放同盟、社青同、青年フォーラム、婦人会議、日生協の五である。

平和フォーラムには原水禁、部落解放同盟が団体加盟、憲法フォーラム(旧社会党の護憲連合の後継組織)は同日解散し新組織に統合、中央労農市民会議(食とみどり、水を守る中央労農市民会議)も十一月十七日解散し、これに合流する。旧総評・社会党プロックで不参加組合は二十一である。

日産京都工場閉鎖で下請け企業はたいへん

「これまでの『合理化』とは雰囲気が違う！」

日産自動車は十月十八日に「リバイバルプラン」を発表し、全国で五つの工場閉鎖、二万一千人の首切り、一千百四十五社の部品メーカーを六百社以下にする、購買コストを二十%削減するとしています。

京都でも宇治市大久保にある京都工場の敷地約二十二万五千平方メートルの大半と社宅子会社用地の約二十三万平方メートルを売却し、約千三百人いる労働者を神奈川県平塚市の湘南工場に異動させ、マイクロバス製造部門二百人のみ残り、事実上閉鎖しようとしています。

下請け・孫受け関連業者など含めればどれだけの影響を及ぼすか、はかり知れないものがあります。社宅も含んでいる小学校区の学校ではクラスで八人もの対象者がいたりしてからかいからいじめにまでなっているケースもあるということです。

このような中、私は十一月四日、地元地労協とタイアップして行った下請け関連企業の聞き取り調査に参加しました。

A工業に訪問した人は、会社役員が応対してくれ、「売上げは七五%位ダウンする。六十名の従業員のうち四十名は人員整理をしなければならぬ。私自身もやめるつもり。今回の件で雇用保険が特別に二ヵ月延長されるとのことだが、従業員のことを気がかり。融資制度の拡充をしてほしい」とのこと、いつもは「組合」と聞いただけで取りつくしまもないところなのに、応接間に通してくれお茶まで出してくれて、涙を浮かべながらの話だったとのこと。

私たちのチームが訪問したところも、「組合」と言っても毛嫌いせず、「アンケート書けると書いてみますわ」といった調子。しかしその日産の京都工場敷地内にある関連会社については、ガードマンがぼつちりとバリケードをはって（そのガードマン会社も訪問対象だったのですが）、中にいれてくれない「アポはとってますか」と門前払いのありさま。しかしその京都工場のアついガードは別にして、もはやかつてよく電通闘争などで聞いたあのセリフ、「うちはおうちでやります」が通用しなくなってきた。他、多国籍大企業の大合理化のありさまの一端がうかがえた現地調査でした。

(稲村 守)

首切られてからでは遅すぎる

埼玉県川越市の仲間が「不当解雇をはねのけて―サカイヤ銘版争議文集」を送ってくださった。一九九八年六月一六日、「解雇通告」を受け、ただちに「地位保全の仮処分」の申請を準備（同、七月）、「申し立て」を浦和地裁に提出（八月七日）、それ以降七回の仮処分審尋、四回の裁判で「現職復帰」の和解を勝ちとった渡辺実由起さんの一人争議「勝利報告書」である。決定内容は「①解雇撤回・現職復帰、②この間の賃金・一時金の支払い、③会社は遺憾の意を表す、④今後いつさいの差別を行わないことを確約する、⑤解決金として五〇万円を支払う」との二二〇%の完勝である。

なぜ、大量失業・首切り時代にかくも短期間に（といっても本人、関係者には何十年にも感ぜられたであろう）完勝できたのか。

まず渡辺さんが間髪入れず「泣き寝入り」しないことを決めた、ただちに「支える会」がつくられた、毎回の審尋に傍聴席がいっぱいとなった、そして会社につけいる隙も与えないよう「用意周到かつ一気呵成に段取り」を組み、実行した三人の弁護士と努力である。この報告集は労働組合強化は①一人でも用意周到かつ一気呵成の段取りがあれば、「整理解雇四条件」を楯に勝利すること、②一人でも「泣き寝入り」しない決意で立ち上げれば回りの仲間と大きな刺激を与えること、③争議の仲間と地域を駆け回ること、職場をこえ全労働者の状態を考えるよう成長することを明らかにしている。

判決文は「整理解雇を回避するための慎重な手段の検討が認められない、解雇以前に役員報酬のカットもない、希望退職の公募もない、解雇の年の四月、五月に新規採用している、要するに解雇回避努力を履跡したとは到底認められない」と述べているという。この判決文は、ここで述べられている諸条項に努力のあとがあれば、「整理解雇」は正しかったとの相反する面もふくむ。

「首切り」社会を「首切りのない」社会に、「首切らせない」労働運動の強化が求められるということである。

(T)

歴史の勉強をやめ歴史をつくろう

—元氣だったアメリカの労働組合(上)—

八月二日から八月二九日まで、東京ユニオンを中心としたアメリカ合衆国の労働運動視察に参加させて頂きました。訪問した都市は西海岸のロサンゼルス、サンフランシスコです。訪問団は精力的に労働組合や大学の研究者との交流を行い、刺激的で学ぶことの多い訪米でした。

労働組合法—日本とアメリカの相違

まず、予備知識として簡単にアメリカの労働事情について説明しておきます。日本の労働組合組織率は七五年頃をピークに減少を続けていますが、アメリカも一九四五年当時三五％レベルであった組織率は年々減少し、現在は一五％を割り込もうとしています。特に民間では一〇％以下になっています。その原因はいろいろありますが、最大のものは、雇用構造の変化です。

アウトソーシング・ダウンサイジングといわれ、正規雇用から臨時、派遣へと、ここ二〇年間にわたり猛烈な労働者の切捨てが強行されました。とくにレーガン政権の時期には、労働組合への弾圧政策（その典型が、航空管制官組合の全員解雇）がとられました。アメリカの労働組合も日本同様、大企業や公務員の正規労働者中心の組織でしたので、正規労働者の激減は労働組合の組織率の減少へと直接結びついてきたのです。今の日本の姿は、まさにアメリカで行われたことを数年遅れで迫りかけているといえます。

アメリカは自由の国と言われています。しかし言葉を変えれば弱肉強食の世界です。たとえば、日本では改悪され続けていますが労働基準法があります。アメリカにも公正労働

基準法という法律がありますが、労働時間規制をのぞきほとんど経営者を規制するものがあります。解雇を規制するものもありません。労働組合法もありますが、むしろ労働組合を作りやすくするための法律だと言われます。日本の労働組合法では不当労働行為というと経営者が労働組合に対して行つてはならない支配介入をさしますが、アメリカの労働組合法では、労働者の側の不当労働行為が定められています。

また、労働組合を結成する場合もたいへんです。私たちは、一人でも労働組合に加入でき会社と団体交渉ができます。しかし彼らは信じられないと言います。アメリカで労働組合を結成しようとすると、まず職場の三〇%の賛同署名を携えて日本で言う労働委員会に申請します。すると審査が行われ、選挙日が決められます。その選挙で過半数の賛成が得られないと労働組合は認められません。もしかりに過半数の賛成が得られても会社から労働組合に不当労働行為があつたと申請されたら労働委員会の審査が行われ、結論が出るころには次々と中心メンバーが解雇され、労働組合は跡形もなくなっている場合もあるそうです。

少し事前説明が長くなりましたが、報告に入る前に予備知識として知っておいて欲しいことを記しました。

アメリカ労働運動に新なうねり

「アメリカの労働運動は今、大きく動こうとしている。」これは、労働組合やUCLAの労働センターなどとの交流で感じた率直な感想です。

アメリカは、今、全世界をそして日本を嵐のように席卷している新自由主義（規制緩和・市場経済至上主義）の先進国です。労働組合は一九四〇年代五〇年代には労働者人口の三五%を組織していましたが、今日では一五%を割込み、民間だけでは一〇%を割り込んでいます。アメリカは労働者保護法がきわめて低い水準にあり、労働者たちは労働組合を組織し労働協約を獲得して権利を守ってきたのです。労働組合組織率低下は、働く者を市場主義原理にストレートに巻き込むことを意味します。事実、正規労働者に代わり、パート・派遣などの非正規労働者が激増しており、労働者間の格差が飛躍的に拡大しています。

そうした状況の中で、九五年に労働組合のナショナルセンターであるアメリカ労働総同盟・産別会議（AFL-CIO）で初めての会長選挙が行われました。「ニューボイス（新しい主張）」というグループが激しい選挙を戦いぬきジョン・スウィニー執行部を誕生させました。私たちが交流した人々がすべて、九五年をアメリカ労働運動の転換点であると自信を持って語っていました。

白人男性中心からマイノリティーが組織者に

オークランドでAFL-CIO組織化研究所を訪ねました。リクルート・コーディネーターを務めるウオレン・マーさんは、「米国の労働運動が衰退したのは、レーガン政権のような労働運動を弾圧する保守政権ができたこともあるが、労働運動自身にも原因があつた。組合のスタッフも役員も白人男性が占めていて、自分たちの問題しか取り組んでこなかった。サービス業では白人は少数派となっているのに。今は、中南米・アジア・黒人の人々を役員にそしてスタッフを迎え入れ組織化に取り組んでいる。」と説明されました。

白人を公務員・大企業正規労働者と読み替えれば、まさに日本の労働運動の現実を言い表していると感じました。ウォレン・マーさんも中国系米国人でした。

アメリカの労働法は、労働組合を結成するには大変不利にできています。簡単に言えば、ある産別組合に加入しようとすれば、選挙で職場の過半数の支持が必要になります。その過程で、企業側は従業員に対し、組合に賛成しないように行動します。従業員一人一人のたいへんな決意が必要なわけです。日本で私たちユニオンが進めている個人加盟で企業と団体交渉をするなどということはありえないのです。

アメリカでもこの法律をどう変えていくのかは、長年議論してきたようですが、ウォレン・マーさんは「どのような状況でも組織化を推し進めるんだと確認している。」と明決に説明されました。そして、組織化の手法として従来は、特に政府系で使用者側とのトップ交渉で「それでは、組織化を認めましょう。」という事があった。しかし現在は、第三世界にあるように直接行動、大衆行動のような形を含め活動し、ボトムアップ型の組織化（下からの組織化）を考えないかぎり進まないということです。形態は違いますし、その規模も違いますが、下からの組織化というのはまさに私たちの目指しているものです。

組織拡大に予算の三〇%

この研究所の任務にオルグの養成があります。週末に一〜三日の講座を開いていて、組合員はもちろん市民や学生も参加するそうです。こうした講座は全国各地で開催され、選抜されればさらに長期の研修も用意されています。

組織化のためのオルグの候補者は、各労働組合からはもちろんですが、学生運動家やマイノリティーの権利擁護の運動を進めている人、環境や平和のために運動している人々など社会正義を求める運動にかかわる人々を対象にしており、ウォレルさんもベトナム反戦運動を経験したそうです。たいへん親近感を持ちました。

AFL-CIOはオルグ養成にはたいへんな力を入れていきます。カルフォルニア大学ロサンゼルス校労働教育センターのケント・ウォン所長の説明では九六年から「ユニオンサマー」と称して夏に学生に呼び掛けて四週間の実地体験を行っているということです。初年度は一〇〇〇人の学生が参加しました。こうした事業が可能になるのは、AFL-CIOが年間予算の三〇%を組織化に当てることを決定し実行に移しているからです。それまでは三〇%程度であったものを一気に一〇倍にしたわけで、組織化に対する並々ならぬ決意を感じました。

このユニオンサマーでは単にテキストなどで学習するだけでなく、労働組合のストライキや大衆行動に参加し、また実際に戸別訪問など組合へのオルグ活動にも参加するそうです。

ユニオンサマーの募集ポスターがしゃれていました。「今年の夏は歴史の勉強をやめて、歴史をつくろう」と呼び掛けていました。事実ユニオンサマーに参加した学生の中から労働運動の楽しさや歴史的な意義を知り、組合オルグを目指すものが出て来ているそうです。こうした組織化への大胆な方針は、成果を上げはじめています。昨年度も組織率低下は止められなかったが、労働組合員数が増加に転じました。

次号では、具体的な組織化の活動についてロサンゼルスのホテルニューオータニでの経験を報告します。

（小西 純一郎・つづく）

『労働者である』ということ

— 全通「人事交流」をめぐる議論に寄せて —

「人事交流」をやむなし、あるいは積極推進すべしと主張する人たちの有力な論拠のひとつは、異動があるのは民間企業ではすでに当たり前のことだという点である。先の全通東京地本大会での小川書記長の最終答弁にもそれはうかがわれる。そこで小川さんは、民間では当たり前のことであっても郵政では行われてこなかったのだから、年配の組合員に抵抗感があるのは理解できるとして、職場の声にも一定の配慮を示している。それなりに情も理もある答弁である。

しかしながら、このように民間では当たり前、かつての郵政職場こそ異常という認識にたてば、「人事交流」に反対するのは、つまり世間知らずのワガママ者だということにならざるをえない。はたして、そうか。

第一に、それが働く者にとって利益になるか否かという点の吟味を抜きに、「民間では当たり前だから…」という具合に論を立てるのは疑問だ。

たとえば民間企業における有給休暇の消化率の低さは「日本人の働きすぎの証明」として国際的にも批判の多い点だが、私たちが「民間にならって」年休を使うことを自主規制することを提唱したとしたら、それは正しいか。明らかに否である。

「民間はもつときびしい」とわけ知り顔をするより、民間企業のひどい実態（それは過去一年間のリストラを原因とする中高年の自殺の急増に象徴的に示されている。そして有力な手段が人事異動なのである）を是正することを官・民をむすぶ労働運動の共通の課題として打ち出すときではないか。

第二に、民間という言葉で「サラリーマン社会」では、と置きかえてみると問題はみえやすくなる。

ここで私が言うサラリーマンとは、ホワイト・カラーである。数年ごとに部署が変わり、ある年齢に達すると管理職になる人のことである。生涯をヒラで終わる人はむしろマレであって、将来の管理職であれば、たしかに多くのポストをめぐるキャリアをつけるのはむしろ必要なことだろう。自身がサントリー宣伝部の有能な社員だった山口瞳の小説に登場するのは、多くはこうしたサラリーマンたちだ。

しかし、そういうサラリーマンとはちがう労働者という種族だつてこの世には存在するのである。浅田次郎原作で現在も公開中の映画『鉄道員（ぽっぽや）』で高倉健が演じる主人公は北海道の過疎の町で駅員一人だけという駅の駅長を定年までつとめる。彼は人事異動とも転勤とも無縁であり、したがってJR内における立身出世とも縁がない。ただ自分の毎日の仕事を誠実につとめあげるのである。肩書は駅長であっても、彼の生き方は労働者のひとつの典型であろう。

私は、サラリーマンとか労働者という言葉を厳密に定義してモノを言っているのではない。雇い主から賃金を得ている者はすべて労働者とも、サラリーマンとも言いうる。このふたつの言葉から私を受けるイメージのちがいを言っているのだ。

さらに私は、労働者なら良くてサラリーマンはダメだと言うつもりもない。私は山口瞳

の愛読者であり、彼の小説の登場人物はそれぞれ魅力的である。だが、サラリーマンとはちがう労働者という生き方だって、もつと大事にされていいのではないか。私に言わせれば鉄道員や炭鉱夫、町工場の工具、それに私たち郵便局員というのはサラリーマンではなく労働者なのである。私自身のことを言わせてもらえば、私はサラリーマンになるのが嫌だったから郵便局に就職した。

しかるに、最近の全通中央本部は労働者よりもサラリーマンになれと組合員に説いているように思える。私が納得できないゆえんである。(T)

天皇在位十年式典は “空振り”

— 国立大学は文部省の “小使い” か —

天皇在位十周年記念式典は、もの見事に空振りに終わった。式典の企画そのものがはじめから異常で政治的意図を感じさせた。「国体護持」、天皇主権の大日本帝国憲法時代でもこんな式典は一度もおこなわれていない。とつじよの「日の丸・君が代法案」制定とこの式典が連動していたことは疑いない。

政府はこの式典の目的を「国民こぞつてこれを祝うため」(九月二十八日、閣議決定)と、「各省庁においては、式典当日国旗を掲揚するとともに、各公署、学校、会社、その他一般においても国旗を掲揚するよう協力方を要望する」など、学校や各家庭にまで「日の丸」掲揚をおしつけた。歩き回ったが、民家に「日の丸」は一本もなかった。

「日の丸」掲揚で天下に恥をさらしたのは、「国立行政法人化」に揺れる国立大学の教師たちだった。十月十九日、①日常的に「日の丸」を掲揚し、②大学の式典では「君が代」を斉唱する、③国旗保全のためには官憲の出勤も要請するとした新潟大学。なぜ学問の自由をこんなに簡単に売り払うことを平気でやるのかと不思議に思ったものだが、その疑問をあっけらかんと語ったのが一橋大学教師だ。「朝日」(十一月十二日夕刊)は、「奉祝『日の丸』撤去——橋大学生ら」と、次のように書いている。

「東京都国立市の一橋大学で十二日午前八時半、天皇在位十年に合わせて大学側が日の丸を掲げた直後、『押し付けだ』と反対する学生たちによって旗が撤去された。寺西重郎・同大学経済研究所長は約五十人の学生らを前に『監督官庁(文部省)に逆らって国旗掲揚を拒否することは、大学の業務遂行に重大な障害をもたらすことが予想される』と述べ、『国旗掲揚をしないこと)予算にはねかえる』。

大学側は『国旗・国歌法が成立した以上、掲揚についてこれまでと違う対応が求められるのは当然だと思う』と話している」と。

大学自治、学問の自由を第一とする学者としての最低限のモラル、国家主義とその統制強化に抵抗する精神はどこにもない。教師は文部官僚の下僕になり下がったことを示した象徴的一駒であった。

皇居前は人気芸能人たちを一目見ようと、今風に飾りたてた少女たちでいっぱい。そしてものものしいでたちのおまわりが鋭い目を周囲にくばる。

「天皇なんか関係ないさ」をあらためて示した式典であった。

合理化の嵐で痛める「乙女心」

—『白紙撤回』の闘いをすすめて—

私たちは、「お客様に楽しい旅を」と、京成電鉄の観光バスガイドとして、毎日、精一杯頑張っています。

しかし、この間、一緒に仕事をしている運転士さんに「賃金が高過ぎる」「赤字だから」と、会社のたび重なる合理化で「定年まで、好きな観光の仕事をしたい」と言っていた願いもかなわず、先輩運転士さんたちは、路線の職場に転勤して行きました。

これも、「京成観光バス職場」を私たちに残したいという、願いがあるからだと思います。この四月からは、新しく入社した運転士さん（ちなみに準社員ですが）も、ようやく職場に慣れてきた矢先、会社は「貸切職場の分社化」を提案してきました。

観光職場は、お客様の都合で朝早くから夜遅くまでの仕事となっています。またシーズン中は、とくに仕事が忙しく十分な睡眠も取れません。私たち観光バスガイドもこの仕事が好きだし、京成電鉄にあこがれて入社しました。それを一方的に踏みこむ会社のやり方は、断じて許すことはできません。私たちは「どうすれば働き続けることができるのか」、「不安な毎日、この怒りをどうすればいいのですか」……

不景気だからと言って、経営が改善されないのは会社の経営努力が足りないからだと思います。これだけ職場が犠牲を強いられてきているのだから、「経営者も責任をしっかりと取るべき」と、声を大にして訴えたい気持ちです。

働く私たちに合理化を押しつけ、経営者だけが生き延びようとすることを考え改め、私たちの『職場と家族の生活』を守る当然の義務と責任が経営者としてあるはずです。

いま観光シーズンで忙しい毎日ですが、合理化提案を受けて、不安と眠れない夜が続いています。私たちは定期大会に参加できませんが、苦しい中でも「ガイド職場」を残してほしいという願いが今大会に反映できますよう、職場代議員に託しました。

『白紙撤回』の闘いをすすめて下さい。共に頑張りましょう。

（京成労組機関紙「京和」より）

鹿児島でも市民投票条例制定の署名運動

—鹿児島湾に「人工島」はいらない—

鹿児島が「人工島建設」問題で揺れている。その盛り上がりは、桜島も真つ青というほどである。話を聞くと県の計画はきわめて杜撰（ずさん）この上ない。鹿児島湾（地元では錦江湾と呼ぶ）を六七ヘクタールも埋めたて人工島を造成し、「日本一の国際会議場」を建設するというのだ。費用は一〇九〇億円におよぶ。

鹿児島目の先に宮崎県がつくった国際会議場「シーガイア・宮崎」がある。その収支決算やいかにと問えば、累積赤字一一〇〇億円との答が還ってくる。これほどの規模でなくとも、全国の地方自治体はハコモノの見本市だ。利用状況が月一〜二回というものもけっして珍しいことではない。鹿児島県は全国のハコモノ行政の教訓を学習することなく、

愚かな行為をくり返そうとしているのだから、鹿児島県民が「かけがえない海、錦江湾への影響とばく大な税金投入のツケは子孫にまで及びます」、「暮らし・福祉・地域振興に使うべきです」と、中止を求め、「市民投票条例制定を求める署名運動」に立ち上がるのも当然のことだ。

署名は十月十六日スタートで十一月十四日までつづく。臨界事故を起こした東海村では「原発いらぬ」の住民投票運動が必要かとの声がある。神戸では「神戸空港反対」の住民署名を無視し、空港建設に邁進する市長のリコール運動が展開中だ。国会は「大政翼賛」状況だが、地域では「直接民主主義」で事態打開の道がもさくさくされている。

本屋さんの今と昔

—恋愛映画に見るアメリカ市場主義のいま—

今年、前半ヒットした『ユー・ガット・メール』というハリウッド映画が早くもビデオ化された。「夕方、減入る」のか、と思つたら You've Got Mail というタイトル。「メールが届いています」という、電子メールを使っている人にはお馴染みの、インターネットに接続したパソコンの画面上に現れるメッセージである。映画のストーリーは、顔も本名もわからないEメール交換（電子文通）では、それぞれの恋人に対する以上に心が通じ合う男女が、実は不倶戴天の商売がたき同士であった、というラブ・コメディ。ハリウッド往年の佳作を現代的装いのものでリメイクしたものだ。演じるは、今や「好感度ナンバーワン」俳優と言えような、トム・ハンクス（『フォレスト・ガンプ』『プライベート・ライアン』）とメグ・ライアン（『めぐり逢えたら』『シテイ・オブ・エンジェル』）。

メグは児童書を売る良心的な街角の店主、トムは大型書店チェーンの経営者。もちろん顧客は、安心を約束された恋の行方を楽しむわけだが、トムの方が先に正体を知ってしまったって、有利にゲームを進めることになったり、メグは明るくしつかりしているように実は誰かに頼りたい願望を持っている・・・といった、アナクロな男性優位構図で終始しており、リメイクの価値は低い。——もつとも、ハリウッドの最近のリメイクものは、仕掛けだけ大きい、つまり資金とハイ・テクだけは投入するが、内容は古めかしいものが多い。

小経営対大規模店

だが、ここで取り上げたいのは、映画のシチュエーションたる小経営対大規模店の競争戦に見られる、もつと明確な市場主義の反映だ。母親から受け継いだハートウォーミングなメグの店は、目と鼻の先のトムの大規模ディスカウント店の攻勢を受けて、存亡の危機を迎える。朝日新聞アメリカ総局長の高成田享氏（以前、テレビ朝日の「ニュースステーション」にも出ていたでしょう）は、アメリカから、この映画に流れる「経済思想」についてレポートしていた（一月二十九日付朝日新聞）。

氏は「この二人が主演し、監督も同じ『めぐり逢えたら』では、困難な状況を乗り越えて、二人の恋が実った。だから、二人が『街角の店』を助けるくらいは、たやすいことだ」と思った。／それに米国映画は、恋愛物語やサスペンスなどのなかで、大企業やウォール

街の不正や虚栄をあばき、額に汗して働くことの大切さを説いてきたではないか。／＼とところが結果は違った」「恋に奇跡はあっても、弱肉強食の市場経済に奇跡はないのか」と不満げだった。ニューヨーク・タイムズ紙の「ハンクスの帝国（大規模店）がそのまま残り、ライアンの（童話店の）プロとしての未来は不確か。街角のロマンチックな店を残す約束すらできないなんて、ハリウッドの終わり方ではない」との批評や、『市場対国家』のダニエル・ヤーギンの「市場経済が公正さを失えば、再び政府の介入や管理が強化される」との談を援軍として引用しながら、「市場と政府との歴史的な勝負は決着がついたわけではない」と強調していたのだ。

しかし、こと書籍販売の業界に限っても、個人経営の書店を中心とした米国書店協会の会員数が、九一年の五二〇〇から九八年の三三〇〇へと激減している、という小経営の駆逐の現実には厳しい。今では映画ですら、古き良き時代の結末では、菌の浮いた絵空事になってしまふ。それほど、「市場原理には逆らえない」というイデオロギーが深く根づいているのだ。人情かビジネスかという、主人公達の人格と資本主義の下での役割行動との衝突は、メグが母親の後継者・トムが三代目との設定で、本人外の責任に帰して緩和されるが、「経済思想」のメッセージの方は一步も譲らない。メグのすてきな街角の店も、大規模店がそのコンセプトを取り込む可能性が示唆されるものの、小経営の早期撤退は「勇氣ある選択」だと宣告される。敗者は市場から早期撤退せよ、敗者復活の道はある（ただし自己責任でさがせ）、それがアメリカ資本主義の強さだ、との近時の思潮そのものだ。

新たな競争者Ⅱ「ネット書店」

しかし、奢れる者も久しからず。映画も高成田氏も見ていない「新しい現実」が押し寄せてくる。トムの帝国の強力なライヴァルとしてのネット書店、オンライン書籍販売が、猛烈な勢いで立ち上がってきているのだ。高成田氏も取材先の、非常な努力を積み重ねている優良個人書店が「コンピューター・ショッピングが急増している影響で、昨年の売り上げは、一五年間の経営で初めて、二けた成長に届きませんでした」と述べていることにもっと注目すべきだった。

このオンライン書店の最人手が、弱冠三四歳のジェフ・ベズ率いる「アマゾン・ドット・コム」だ。ウォール街出のベズスが、自宅ガレージから始めた書籍のオンライン販売は、今や全世界の顧客九〇〇万人超を対象に、三〇〇万点の書籍や音楽CDを扱い、年商八億ドルとも言われる超成長企業に発展した。株式時価総額は、小売り大手のシアーズをも上回る一八五億ドルという。ベズフは、米ニューズウィーク誌による「21世紀のリーダー100人」のひとりにも選ばれている。我らがメグも、インターネット上で、きめ細かな児童本のサービスを開始すれば、売り場面積だけがダダッ広いトムの店を逆転できるかもしれない。そして、今日の優位性の源である店舗規模の大きさが、明日は対立物に転化するかもしれないのだ。現に映画封切り後、個人書店のネット進出が増している。

しかし、そのとき二人は、恋もビジネスも、二つながら失うリスクを負うとともに、とめどもない競争が、いつ果るともなく続くことになろう。皮肉にも、映画では「奇跡」ならぬ男性優位の保守主義が恋愛幻想を救っているのだ。だが、本来市場原理は性差を認めないものはずだろう。現実には女が降りるとは限らない。それでは、高成田氏のよう

に、市場に対する政府の規制に期待すべきだろうか。それとも、市場万能主義の暴走は、ついにはハリウッド現代劇から恋愛映画を奪うのだろうか。市場主義のなせる技として、ビデオ化による資金回収が早まっているのは何かを物語っているようだ。(野上 昭)

批判と共闘

最近、「批判と共闘」を考えさせられる機会が多い。私たちの力が弱くなり、「共闘」をしなければ一定の運動を創り得なくなつたからであろう。また、いままでの「社会党—総評—大単産」という「実体」に寄りかかつて、「マルクス・レーニン主義—労農派—社会主義革命」理論を「教条的」に唱えていた時代と運動への反省でもあろうか。しかしそのような総括をしたといつても、永年の活動の中でしみ込んだ体質か、それとも、いわゆる「日本人的体質」か、私たちは「批判と共闘」は苦手で、「非難と対立」になる場合が多いように思う。

その一つの例として、かつて全通運動はなやかなりしころ、組合方針を批判する組合員を役員・活動家が「統制力と機関決定」を武器に「つるし上げる」ことが多々あった。批判を拒否する体質である。これが全通の「鉄の団結」の一面でもあった。それは全通だけでなく、日本の社会主義運動、労働運動の欠点の一面でもあり、「社会党—総評ブロック」崩壊の一要因でもあつたと思う。

私は「共闘」ということを意識的に考えて活動するようになって(せざるを得なくなつて)十五年くらい経つ。前半は全通分会役員活動として、後半は全通主流派批判運動「分会交流会」活動として。その時よく言われたのは「お前は組合員にも、極左にも、日共にも甘い、弱い。全通への忠誠心、統制力が欠けているからだ。思想性が弱いからだ。」と非難されてきたものだ。

いままでの小さな経験で学んだこと、①「人の体は縛れても、心は縛れない」を基本的に②資本・当局と闘うために「論争・共闘」するのであって、論争相手を論破するために批判するのではない、③批判は明確に戦術は柔軟にである。これはなかなか難しい。感情的になつたり、アイマイになつたり、何もしない口実になつたりするからである。

私は「平均」よりチョット高いところに合わせて、と考えてきた。④「理論を批判して人を憎まず」である。批判のあまり論争相手の人格をも否定する人が意外と多いのである。これでは共闘よりも対立を創り出すことになる。⑤論争相手、他党派からも学ぶことが必ずある。たとえ反面教師的ではあつても、ということである。⑥そして、自分を鍛えるために「論争・共闘」を求めていく心構えである。臆することが多いが、とは書いてはみたが、十五年間の小さな経験の中でつかんだ私の理想であり、心得である。現実の運動に生かされていないじゃないか、と言われれば、それはまったくそのとおり、と引き下がるしかない。しかし、冒頭にも書いたが、「批判と共闘」が必要な時期に「非難と対立」になることが多いように思う。そのことがまた「非難と対立」の原因になり、非難↓対立↓分裂の悪循環スパイラルに陥つていく危険性を感じるのである。

「激動の時代」への胎動を感じながら、もう少し若かつたら、病弱でなかつたらと言ひわけしながら牛歩を進めている。

◇ 読者からのおたより ◇

組織と現場 組合の幹部をしているが、組織の方針とぶつかっている。組織は現場労働者の人権を軽視している。働く者の人権なくして介護者や住民の人権は守れない。(自治労・U)

編集部より 今もつとも組合機関役員が問われるところ。論議してそして方針出して。

ささいなことにコダワル いよいよ日の丸・君が代が強制される世の中になってきた。今、労働者は「ささいなこと」にこだわれなく(こだわらなく)なっている。ささいなことにこだわらなければ、大きな闘いにこだわれない。(日教組・K)

編集部より 「はじめの一步」、それは小さなことにこだわること。資本のエゲツナサはまさにそう。『共産党宣言』のマルクスの言葉が現実です。

女性ももっと書いて 男性の姿が多く、この通信に嘉津子さんの資料はすばらしいです。女性も、がんばって書いてもらえるといいですね。(千葉・N)

編集部より 十月三十一日の「国労だんけつまつり」でお会いでき嬉しかった。

三年間で百三十万円の賃金削減 石原知事の一人平均年間四三万円賃金削減案(三年間で百三十万円。三年で止めるというっていない)に、職場の組合員の怒り、反発が徐々に高まり、盛り上がりが出てきている。当初は知事の強権姿勢や民間のリストラ旋風で、やられてしまうのかも:〃と弱気になった人も、その後、都労連の白紙撤回闘争宣言と、組合役員等の努力、大小さまざまな学習会や集会で、多く結集してきている。組合の存在を問われる闘いだ。石原知事をして、大幅譲歩が必至と思わせる、我々の大衆闘争を創り出そう。(自治労・Y)

資料ありがとう このたび、貴重な資料をありがとうございます。手さぐりでやっていますので「介護保険」についての社会通信の記事は助かっています。今回の資料も私にとってはドキドキするものです。これからも、お手数ですがご支援下さい。私の方の資料も送ります。ご批判下さい。足でつかんでないもので、これからです。(愛媛・N)

編集部より 嬉しいおたよりで大感激。「介護」めぐって自非公、政治は大激動。時代が動く証。金欠状態 送金おくれてごめん。金欠状態がつづいてまして:。でも読んでます。(大阪・F)

編集部より どこも同じ。金なくってー、しばらく待ってとの声聞くようになりました。と同時に、日本はどこへ行つちまうのかも。さらにご活躍を!

組合役員のなり手がいない 民主党のために労働組合はあるのかと思われる昨今、昔からの心ある人間は役員にでる気にはなれない状況です。(北海道・A)

編集部より まず「集まり」、次に「議論し」、そして「方針」を出してよ。

「国共合作」必要な時 私は二十歳代の八年間を関東軍とシベリア抑留で過ごした者です。問答無用時代の再来を防ぐために、今こそ小異を措いて志を同じくする者みんなが一緒にになり、かつて中国の光華が行った作業「国共合作」のような戦略を考える時では。(横浜・F)

編集部より だれがイニシアチブをとり、どう大きく戦線広げるか。経験談よろしく。

工場閉鎖・配転攻撃の中で 鷹取工場(JR西日本会社)も十二月末で廃止になり、来年一月から網干総合車両所へ移転がはじまります。JR西のことですから、私たちを網干へつれて行くとはかざりません。とうぜん私も以前から「お前は網干へはつれていかない」と言われていますので。どこへ行かされようとも「通信」は読みたいと思っています。(国労西日本・K)

編集部より 今日の合理化は国鉄「分・民」から始まりました。国労の闘い、横に抜けようよ。国鉄闘争勝利の一大条件です。

久しぶりです 先日、神奈川三浦半島での労働者委員会交流会で久しぶりに話を聞きました。少し時間がたりなかった。いつかゆつくり集まりたい。(新潟・O)

編集部より 二つのことしゃべっちゃって。労働運動、とりわけ連合の動向にしばらくこめばよかったです。ごめんさい。中途半端に終わっちゃって(広島・I)

新社会党と労組の前進めざす 新社会党と労働組合の前進をめざして新たな課題に向かって闘います。(広島・I)

編集部より 選挙に立候補されるとか。まずは勝利して。

初雪 初雪が降りました。半年間の雪の季節。みんな元気ががんばっています。(名寄・SK)

共通の反撃の条件 むき出しの資本主義的合理化攻撃となった政治情勢となりましたね。今こそだれにも共通の反撃の条件が生まれたことだと思います。(広島・K)